

## 豊かな学びを創造するゆとりある教育課程の編成と実践

### I 研究内容

#### 1 研究の方向性

新学習指導要領全面実施を控え、子どもたちの学力向上に対する期待が高まっている。私たちは、「何を学ぶか」ではなく、「どのように学ぶか」を改めて問い直し、自主創造的な教育実践を積み重ねることによって、これらの声に対する結果を出していかなければならない。子どもたちに「ゆたかな学び」を保障していくために、質の高いカリキュラムや実践を創造していくことは、私たち教職員の使命である。子どもの実態をふまえ、教材の活用や授業の展開を徹底的に検討することに加え、カリキュラムや授業プランを工夫して、その内容や方法を創り変えていく必要がある。すべての子どもたちに、学び合いの中で「学びの意欲」を喚起させる「わかる授業」「楽しい授業」を創造するために、日々、目の前にいる子どもたちの実状に合わせたカリキュラムを追究し続けていかなければならない。

本部会ではこれまでに、主にカリキュラム編成の工夫について総合的な学習の時間を中心に研究を進めてきた。部会員全員がそれぞれの実践を持ち寄って意見交換を行い、総合的な学習の時間における指導の工夫や可能性について討議を重ねてきた。新学習指導要領においては、「基礎的・基本的な知識・技能の習得」と「知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等の育成」によって学力向上を図ることが示されているが、時間数が削減された総合的な学習の時間においては、各教科で学んだ知識や能力を生かすことによってその成果を高めることが期待されている。そこで本部会においては、総合的な学習の時間だけにこだわらず、他の教科での実践も視野に入れ、自主編成によるカリキュラムの工夫について研究を進め、検証結果を日常実践に還元していくことを目指している。

授業実践においては、多角的な視点をもって教材や単元を分析しながら「どのように教えたらよいか。」「どういう授業を展開したら効果的か。」を模索していくことを基本とし、定められた指導計画によるものではなく、「教科書」で「教える。」という意識を大切にしながら、自主創造的な学習プランを策定して実践を進めていく。

そのために、次の3つの視点を重視して、成果の検証にあたる。

- (1) 授業（単元）における、「子どもにつけさせたい力」は何かを明らかにする。
- (2) 授業（単元）において、授業者が「自主編成した部分はどこか。」「工夫したところや作り直した点はどこか。」を明らかにする。
- (3) 授業（単元）のふり返りや分析を丁寧に行い、成果と課題を明らかにする。

授業の分析においては、授業の様子を撮影した画像・映像の効果的な活用と、子どものノート・作品・感想記述などを、時間をかけて多角的に分析していくことによって、子どもの変容をみとり、成果と課題を明らかにしたい。本部会としては、すべての子どもたちの「学びたい」という意欲を引き出す工夫と、すべての子どもに「豊かな学び」を保障していくことによって、結果として子どもたちの学力の向上にもつながるように、内容や方法を捉え直す努力を積み重ねていきたい。

## 2 研究授業と各教科などにおける個人実践発表

◎研究授業 「大地震が起こった時の動きを考えよう」	山梨南中 :	日野原裕子	教諭
○共同絵画・学級満足度・自己開示	勝沼中 :	天野秀太朗	教諭
○見通しを持たせ解決方法を考える「物が燃え続けるには」	東雲小 :	山縣 重人	教諭
○Scratch を体験しよう	松里小 :	小椋 規雄	教諭
○生命の大切さ「ニワトリ」	勝沼中 :	丹澤基予子	教諭
○ICT 環境の活用	勝沼中 :	桐原 誠之	教諭
○A Mother's Lullaby	山梨南中 :	大村 隆	教諭
○少人数の利点を最大限生かす 地域との連携を意識した総合学習	大和中 :	前島 香織	教諭
○難聴児「9歳の壁」について	日川小 :	深味 朝日	教諭
○生活を豊かにする計測・制御の工夫をしよう	松里中 :	酒井 幸政	教諭
※ 指導助言	加納岩小 :	嶋崎 修	校長
	松里小 :	古屋 宏記	教頭
	勝沼中 :	長坂 俊彦	教頭

## II 成果と課題

### 1 成果

- 校種や教科を超えての実践をもとに、小中それぞれの立場で検討したり情報交換したりでき、実践に生かすことができた。
- 視野の広がりを意識できるような幅広い内容で実践が交流され、自校でのカリキュラムづくりにも役立てることができた。
- 「身に付けさせたい力」を明確にすることや、それに向けた効果的な展開の方法などを学ぶことができた。
- プログラミング教育への理解が深まり、実践に役立てることができた。
- 防災教育の必要性を再確認でき、自身の取組に生かすだけでなく、様々な場での設定を考えたり、自校での取組の疑問点や不安を改善したりする手立てとすることができた。
- 防災教育の実践に向けて、様々な立場で建設的な意見が出され、資料収集や展開のアイデアも交流でき、たいへん効果的だった。
- 今年度の研究の内容や方法を意識した実践を行うことができた。理論研究の上に授業を行う重要性を確認できた。

### 2 課題

- ・「身に付けさせたい力」をどうしたら育成できるか、カリキュラムをどう作ったらいいのかという視点を取り入れると良かった。
- ・変容を見取ることや、手立てにどんな成果と課題があったかなどが検証できると、自分の実践にさらに役立てられる。レディネステストの実施で数値的な記録を残したり、ワークシートの工夫をしたりすることが振り返りや分析を丁寧に行うことにつながる。
- ・学年を超えて系統的に位置づけられた授業を行い、子供の変容が見取れると良い。
- ・理論研究 (P) → 実践 (D) → 部会での検討・協議 (C) → カリキュラムへの反映 (A) が常に意識されていく必要がある。

(部長 小椋 規雄)